

図書館講演会 開催報告

令和 8 年 6 月 28 日(日)「ウィーン文化への招待―都市の地層をたどる―」



6 月 28 日、府中市立図書館・ウィーン市立ヘルナルス図書館友好協定 30 周年を記念し、「ウィーン文化への招待 ―都市の地層をたどる―」を開催しました。講師には東京外国語大学教授の山口裕之先生をお招きし、オーストリアの歴史と文化、そしてウィーンという都市の魅力についてご講演いただきました。

講演の冒頭では、ウィーン市ヘルナルス区を紹介しながら、近接する観光の中心地第一区についても、地図を示して「東京でいえば中央区や千代田区のような場所でしょうか」と説明され、参加者の皆さんも府中市と交流のある地域とのつながりを実感しながら耳を傾けていました。

続いて、「そもそもオーストリアとはどのような国だろうか」という問いかけから講演が進められました。同じドイツ語圏に属するドイツとオーストリアですが、その歴史的な歩みは大きく異なります。神聖ローマ帝国の成立から近代に至るまでの歴史をたどりながら、ドイツとオーストリアの関係や、民族的にはドイツ系でありながら独自の文化や国家を育んできたオーストリアの歩みについて、わかりやすく解説していただきました。また、「この頃の日本では江戸時代にあたります」と日本史と対比しながらお話しされる場面もあり、ヨーロッパの歴史を身近に感じる事ができました。

後半では、「世紀末ウィーン」の文化へと話題が移りました。まず、要塞都市だったウィーン



が城壁を取り払い、リングシュトラッセの建設によって近代都市へと変貌していった過程が紹介されました。国会議事堂や市庁舎、現在の国立歌劇場などの壮麗な建築群は、帝国の首都としての威信を示す存在として整備されたそうです。スクリーンには、それぞれの建物の写真が映し出され、多くの参加者が見入っていました。

続いて、建築・デザインの分野では、オットー・ヴァーグナーらの活動やウィーン工房の取り組みが紹介されました。芸術を生活の中に取り入れようとする試みや、アドルフ・ロースによる装飾批判を通して、華やかな世紀末文化が次第に近代的な合理性へと向かっていく様子を知ることができました。

絵画の分野では、グスタフ・クリムトを中心とするウィーン分離派の活動が取り上げられました。「時代にはその芸術を」という理念のもと、既存の価値観に挑戦し、新たな芸術を切り開こうとした人々の姿についてお話いただきました。また、それまで限られた人々のものであった芸術や文化の担い手が市民層へと広がり、新しい文化が生み出されていったことにも触れられました。さらに、エゴン・シーレの作品についても解説がありました。神経質さや痛々しさを感じさせる独特の表現は、クリムトとは異なる世紀末芸術の一面を示しています。多くの作品画像を見ながら先生の解説をうかがうことで、その魅力や特徴への理解を深めることができました。

音楽の分野では、グスタフ・マーラーの《交響曲第8番「千人の交響曲」》と、アルノルト・シェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》が取り上げられました。実際に音源を聴きながらの解説では、マーラーによる壮大で祝祭的な響きや、シェーンベルクの革新的な表現に触れることができました。会場に音楽が流れると、参加者は静かに耳を傾け、それぞれの作品世界を味わっていました。また、後に十二音技法を確立するシェーンベルクの試みについてもお話いただきました。

講演の終盤では、世紀末の華やかな文化も長い歴史の積み重ねの中から生まれたものであり、さまざまな時代の文化や人々の営みが重なり合って現在のウィーンが形づくられていることをうかがいました。「都市の地層」という視点から歴史と文化を読み解く奥深さを実感できる講演会となり、参加者からは、「ウィーンという都市を通してヨーロッパの歴史を立体的に理解することができた」「歴史・美術・音楽がつながっていて興味深かった」「実際にウィーンを訪れてみたくなった」などの感想が寄せられました。

府中市立図書館では、『映画に学ぶドイツ語』（教育評論社）『現代メディア哲学 複製技術論からヴァーチャルリアリティへ』（講談社）を含む山口裕之先生のご著書を多数所蔵しています。ぜひお読みいただきたいと思います。